看護婦と看護職のイメージに影響を及ぼす諸要因（II報）
── EPPS性格検査を加えて ──

川崎医療短期大学　第二看護科

松本　明美　　姫井富貴子　　林　喜美子

（平成３年８月26日受理）

The Influence of Various Factors on the Student Nurse and Nursing（II）

Akemi MATSUMOTO, Fukiko HIMEI and Kimiko HAYASHI

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan
(Received on Aug. 26, 1991)

Key word：看護婦，看護職，イメージ，要因

概　　要

第Ｉ報では，看護婦および看護職に関するイメージに影響する諸要因について調査した。今回は影響要因にEPPS検査を加えるとともに１年間の学年別変化，現在の進路選択に対する評価を中心にアンケートの回答を多変量解析を用いて検討した。

各イメージの因子分析結果は第Ｉ報と非常によく一致した。また影響を及ぼしている要因ではEPPS検査の「達成」「養護」「変化」の欲求度で，それらは進路選択の満足度とも関連があった。１年間の学年別変化では１年から２年の時期が大きいことが明らかとなった。進路選択に対する評価に影響を及ぼしている要因としては「科・学年」「仕事にきびしさ」「知的専門性」「仕事のやりがい」の肯定度およびEPPS検査の「追従」「持久」「変化」「親和」の欲求度であった。得られた結果より，学年時期に即応した指導，適性を高めていく教育方法の改善等今後の課題が明確となった。

Ｉ．はじめに

第一報で看護婦に対するイメージと，看護職に関する職業イメージを調査した。今回は影響要因としてEPPS検査を加え，併せて各因子に大きな影響を及ぼしていた「科・学年」「現在の進路選択に対する評価」に焦点を当てて調査した。２～３の知見を得たのでここに報告する。

II．方　　法

１．調査項目及び方法

看護婦に対するイメージ（以下看護婦イメージと略す）および看護職に関する職業イメージ（以下職業イメージと略す），それらに影響を及ぼすと考えられる要因については，留置法によるアンケートを1990年６月25日～29日（１回目），1991年７月８日～16日（２回目）を行った。看護婦イメージとしては表１に示す20項目を，職業イメージとしては表２に示す20項目を取り上げ，①まったく当てはまらない，②当てはまらない，③どちらともいえない，④当てはまる，⑤非常に当てはまる，の５段階評定によるる回答を求め，それぞれの回答に１，２，３，４，５の得点を配した。また性格検査としては表３に示すAlien L. Edwords原著のEPPS検査を用いた。

影響を及ぼすと考えられる要因としては表４に示した25アイテム(I)とカテゴリーを取り上げ

表1　看護婦イメージ

Q1：美しい
Q2：冷たい
Q3：重労働
Q4：体力がある
Q5：判断力がある
Q6：かわいい
Q7：冷静ない
Q8：忙しい
Q9：科学的な
Q10：頭がよい
Q11：大変な
Q12：気がきつい
Q13：責任感がある
Q14：素敵な
Q15：やさしい
Q16：健康な
Q17：笑顔の
Q18：意地悪な
Q19：あたたかい
Q20：知識がある

表2　職業イメージ

Q1：資格がとれる
Q2：収入が多い
Q3：人のためになる
Q4：興味がある
Q5：聖職
Q6：安定した職業
Q7：自己の性格にあっている
Q8：学習したことが生かせる
Q9：研究活動ができる
Q10：専門的な仕事
Q11：自己の学力にあっている
Q12：責任感のある仕事
Q13：一生続けられる
Q14：高い地位につける
Q15：人の世話ができる
Q16：自立できる
Q17：社会に貢献できる
Q18：器械相手でない
Q19：離職しても再就職できる
Q20：将来性がある

表3　EPPS検査

EPPS 1：達成
EPPS 2：追従
EPPS 3：秩序
EPPS 4：顕示
EPPS 5：自律
EPPS 6：親和
EPPS 7：他者認知
EPPS 8：求護
EPPS 9：支配
EPPS 10：内罰
EPPS 11：養護
EPPS 12：変化
EPPS 13：持久
EPPS 14：異性愛
EPPS 15：攻撃

た。このうちI6，I7の職業イメージに関わる2アイテムは職業イメージの因子分析の結果抽出された2因子それぞれに対して因子スコアー値で3つのカテゴリーに分類したものである。I23，24，25は看護婦イメージの因子分析の結果を同様に3つのカテゴリーに分類したものである。I8～I22まではEPPS検査の欲求分類による欲求度により3つのカテゴリーに分類したものである。

2．調査対象

1990年第一看護科（1N）157人と第二看護科（2N）106人，回収率100%

1991年第一看護科151人，第二看護科102人，回収率100%

3．統計学的解析

多変量解析には，因子分析法および数量化理論第一類を適用した。因子分析には主因子法(ヤコビ法)・バリマックス回転法を，因子スコアーの算出は真の因子スコアーの最小二乗推定値による方法を用いた。抽出因子数は固有値が1.0以上を基準にして決定した。

また平均値の差の検定には，t検定を用いた。

表4　要因アイテムとカテゴリー

要因アイテム	カテゴリー	人数
I1：科・学年	C1：1N1年	47
	C2：1N2年	52
	C3：1N3年	50
	C4：2N1年	55
	C5：2N2年	45
I2：受験時の進路選択状況	C1：看護職以外の進路も考えていた	81
	C2：看護職だけを考えていた	168
I3：家族，知人に看護職がいるか	C1：いる	146
	C2：いない	103
I4：自分や家族の入院経験の有無	C1：ある	222
	C2：ない	27
I5：現在の進路選択の評価	C1：看護婦職を選んでよかった	106
	C2：看護婦職を選んでよくなかった	9
	C3：わからない	134
I6：仕事のやりがい肯定度	C1：因子スコアー：＞0.5	74
	C2：因子スコアー：－0.5～0.5	114
	C3：因子スコアー：＜－0.5	61
I7：職業としての安定性肯定度	C1：因子スコアー：＞0.5	76
	C2：因子スコアー：－0.5～0.5	112
	C3：因子スコアー：＜－0.5	61
I8：EPPS 1 達成	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	21
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	182
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	46
I9：EPPS 2 追従	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	29
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	183
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	37
I10：EPPS 3 秩序	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	16
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	187
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	46
I11：EPPS 4 顕示	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	100
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	142
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	7
I12：EPPS 5 自律	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	9
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	177
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	63
I13：EPPS 6 親和	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	74
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	157
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	18
I14：EPPS 7 他者認知	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	37
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	166
	C3：15% ile 以下(求欲度　弱)	46
I15：EPPS 8 求護	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	54
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	172
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	23
I16：EPPS 9 支配	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	27
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	189
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	33
I17：EPPS10 内罰	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	43
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	178
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	28
I18：EPPS11 養護	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	71
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	141
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	37
I19：EPPS12 変化	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	84
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	151
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	14
I20：EPPS13 持久	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	15
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	165
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	69
I21：EPPS14 異性愛	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	80
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	154
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	15
I22：EPPS15 攻撃	C1：85% ile 以上(欲求度　強)	43
	C2：16～84% ile (欲求度　中)	185
	C3：15% ile 以下(欲求度　弱)	21
I23：「やさしさ・あたたかさ」肯定度	C1：因子スコアー：＞0.5	63
	C2：因子スコアー：－0.5～0.5	116
	C3：因子スコアー：＜－0.5	70
I24：「仕事のきびしさ」肯定度	C1：因子スコアー：＞0.5	93
	C2：因子スコアー：－0.5～0.5	87
	C3：子スコアー：＜－0.5	69

III．結　　果

1．看護婦イメージの構造

因子負荷量0.4以上の項目の内容を中心に解釈を行った。各因子を特徴づける質問項目および因子負荷量を表5に示す。抽出された3因子よりそれぞれ「やさしさ・あたたかさ」「仕事のきびしさ」「知的専門性」と解釈した。第一因子から第三因子まで，それぞれについて因子負荷量の大きい項目を併せて1組とし，その回答の平均得点（負の因子負荷量を示した項目には①，②，③，④，⑤の回答にそれぞれ5，4，3，2，1の得点を配した）を求めた成績を表5-1に示す。

表5　看護婦イメージの因子負荷量

因　子	質　　問	因子負荷量	固有量	累積寄与率(%)
第一因子	2．冷たい	−0.63	3.41	17.1
「やさしさ・あたたかさ」	12．気がきつい	−0.64		
	15．やさしい	0.56		
	17．笑顔の	0.54		
	18．意地悪な	−0.63		
	19．あたたかい	0.61		
第二因子	3．重労働	0.61	2.48	29.5
「仕事のきびしさ」	4．体力がある	0.60		
	5．判断力がある	0.46		
	8．忙しい	0.54		
	11．大変な	0.57		
	13．責任感がある	0.49		
	20．知識がある	0.46		
第三因子	1．美しい	0.47	1.11	35.0
「知的専門性」	6．かわいい	0.44		
	7．冷静な	0.34		
	9．科学的な	0.41		
	10．頭がよい	0.55		
	14．素敵な	0.55		
	16．健康な	0.27		

表5-1　看護婦イメージの因子別平均得点

	例数	平均値 ± 標準偏差	t　検　定
第一因子	251	3.54 ± 0.56	**
第二因子	251	4.58 ± 0.33	** *
第三因子	251	3.45 ± 0.44	

2．職業イメージの構造

因子分析の結果を表6に示す。第一因子は「仕事のやりがい」第二因子は「職業としての安定性」と解釈した。因子別に回答の平均得点を求めた成績を表6-1に示す。

3．諸要因の看護婦イメージに及ぼす影響

看護婦イメージとして取り上げた20項目および要因として取り上げた25アイテムのすべてに回答のあった249人（回答者の98%）のデーターを検討の対象とした。看護婦イメージの因子分析によって求められた3因子の因子得点それぞれを外的基準とし，数量化理論第一類によって解析を行った。解析の結果は表7-1，7-2，7-3に示す。カテゴリーの重み値は偏相関係数が比較的大きい値(0.1以上)となった要因のみ示した。因子得点は＋の絶対値が大きいほど肯定的イメージが強いことを示し，従って＋の絶対値が大きい重み値のカテゴリーを属性とするものほど肯定的イメージが強いといえる。第一因子の「やさしさ・あたたかさ」のイメージにはI 1，5，6，18，19．21が影響を及ぼしている。第二因子の「仕事のきびしさ」のイメージにはI 3，6，7，8，19が影響を及ぼしている。I 8については達成の欲求が強い者ほど仕事がきびしいとは受け止めておらず，変化の欲求が強い者ほど仕事がきびしいと受け止めている。

第三因子の「知的専門性」のイメージにはI 1，4，5，6，7，10，13，14，20が影響を及ぼしている。EPPS検査では秩序の欲求度が弱い者ほど肯定的で，他者認知の欲求が強い者ほど肯定的である。親和と持久の欲求が普通の者だけが肯定的である。

表6　職業イメージの因子負荷量

因　子	質　　問	因子負荷量	固有値	累積寄与率(%)
第一因子	3．人のためになる	0.67	4.57	22.9
「仕事のやりがい」	4．興味がある	0.60		
	5．聖職	0.54		
	7．自己の性格にあっている	0.45		
	8．学習したことがいかせる	0.65		
	9．研究活動ができる	0.41		
	11．自己の学力にあっている	0.32		
	12．責任感のある仕事	0.51		
	15．人の世話ができる	0.65		
	17．社会に貢献できる	0.62		
第二因子	1．資格がとれる	0.53	1.73	31.6
「職業としての安定性」	2．収入が多い	0.36		
	6．安定した職業	0.62		
	10．専門的な仕事	0.58		
	13．一生続けられる	0.42		
	14．高い地位につける	0.47		
	16．自立できる	0.41		
	18．器械相手でない	0.25		
	19．離職しても再就職できる	0.63		
	20．将来性がある	0.61		

表6-1　職業イメージの因子別平均得点

	例数	平均値 ± 標準偏差	t　検　定
第一因子	251	3.74 ± 0.46	**
第二因子	251	3.89 ± 0.46	

**：$p < 0.01$

4．諸因子の職業イメージに及ぼす影響

職業イメージの因子分析によって求められた2因子それぞれの因子得点を外的基準とし数量化理論第一類によって解析を行った。取り上げた要因アイテムは表4に示すI 1～5，18～22の20項目である。解析の結果を表8-1，8-2に示

表7-1　諸要因の看護婦イメージ第1因子得点に及ぼす影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	0.36	0.28	0.65
	C 2	0.12		
	C 3	− 0.30		
	C 4	0.05		
	C 5	− 0.23		
I 5	C 1	0.13	0.14	0.23
	C 2	0.01		
	C 3	− 0.10		
I 6	C 1	0.20	0.24	0.53
	C 2	0.05		
	C 3	− 0.34		
I 18	C 1	0.11	0.10	0.17
	C 2	− 0.07		
	C 3	0.05		
I 19	C 1	− 0.14	0.18	0.43
	C 2	0.11		
	C 3	− 0.33		
I 21	C 1	− 0.04	0.12	0.39
	C 2	− 0.02		
	C 3	0.35		

表7-2　諸要因の看護婦イメージ第2因子得点に及ぼす影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 3	C 1	− 0.08	0.11	0.19
	C 2	0.11		
I 6	C 1	0.27	0.21	0.43
	C 2	− 0.08		
	C 3	− 0.17		
I 7	C 1	0.36	0.28	0.54
	C 2	− 0.15		
	C 3	− 0.18		
I 8	C 1	− 0.50	0.22	0.76
	C 2	− 0.01		
	C 3	0.26		
I 19	C 1	0.09	0.12	0.45
	C 2	− 0.02		
	C 3	− 0.36		

表7-3　諸要因の看護婦イメージ第3因子得点に及ぼす影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	− 0.28	0.24	0.56
	C 2	0.03		
	C 3	− 0.13		
	C 4	0.10		
	C 5	0.29		
I 4	C 1	− 0.03	0.12	0.27
	C 2	0.25		
I 5	C 1	0.21	0.23	0.53
	C 2	− 0.32		
	C 3	− 0.14		
I 6	C 1	0.31	0.39	0.84
	C 2	0.09		
	C 3	− 0.54		
I 7	C 1	0.13	0.24	0.44
	C 2	0.08		
	C 3	− 0.31		
I 10	C 1	− 0.30	0.14	0.44
	C 2	− 0.01		
	C 3	0.14		
I 13	C 1	− 0.06	0.13	0.32
	C 2	0.06		
	C 3	− 0.26		
I 14	C 1	0.18	0.11	0.24
	C 2	− 0.02		
	C 3	− 0.06		
I 20	C 1	− 0.56	0.19	0.62
	C 2	0.06		
	C 3	− 0.02		

表8-1　諸要因の職業イメージ第1因子得点に及ぼす影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	0.07	0.20	0.48
	C 2	0.08		
	C 3	0.06		
	C 4	0.11		
	C 5	− 0.36		
I 2	C 1	− 0.13	0.11	0.20
	C 2	0.06		
I 5	C 1	0.26	0.27	0.87
	C 2	− 0.61		
	C 3	− 0.17		
I 8	C 1	0.25	0.10	0.36
	C 2	0.00		
	C 3	− 0.12		
I 9	C 1	− 0.18	0.11	0.23
	C 2	0.05		
	C 3	− 0.13		
I 12	C 1	− 0.34	0.14	0.51
	C 2	− 0.05		
	C 3	0.18		
I 15	C 1	− 0.19	0.13	0.25
	C 2	0.07		
	C 3	− 0.05		
I 18	C 1	0.06	0.11	0.29
	C 2	0.03		
	C 3	− 0.23		

表8-2　諸要因の看護婦イメージ第2因子得点に及ぼす影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	− 0.06	0.11	0.27
	C 2	− 0.04		
	C 3	0.04		
	C 4	− 0.09		
	C 5	0.18		
I 2	C 1	0.13	0.10	0.19
	C 2	− 0.06		
I 4	C 1	0.05	0.17	0.47
	C 2	− 0.42		
I 5	C 1	0.12	0.13	0.33
	C 2	0.22		
	C 3	− 0.11		
I 11	C 1	0.09	0.14	0.72
	C 2	− 0.04		
	C 3	− 0.62		
I 12	C 1	− 0.43	0.15	0.50
	C 2	0.08		
	C 3	− 0.15		
I 15	C 1	0.19	0.18	0.65
	C 2	0.00		
	C 3	− 0.46		

す。第一因子「仕事のやがい」のイメージには，I 1，2，5，8，9，12，15，18が影響している。I 2の進路選択を看護職だけに希望していた者の肯定度が高く，I 5の現在の進路選択に満足している者の肯定度が高い。EPPS 検査では達成の欲求が強い者ほど，養護の欲求が強い者ほど肯定的であり，自律の欲求の強い者ほど否定的である。追従と求護に関しては欲求度の普通の者が肯定的で，強い場合弱い場合いずれも否定的と解釈できる。

第二因子の「職業としての安定性」の意識に

は，Ｉ１，２，４，５，11，12，15が影響している。「仕事のやりがい」と異なり「安定性」はＩ２の看護婦以外も希望していた者の肯定度が高い。また進路評価も「よかった」「わるかった」と答えた者よりむしろ現時点では「わからない」としている者の肯定度が低い。EPPS 検査では顕示と救護の欲求の強い者ほど肯定度が高く，自律の欲求の強い者の否定度が高い。

５．1990年度１Ｎ１，１Ｎ２，２Ｎ１の学生の看護婦イメージおよび職業イメージの１年後の変化

1990年よび1991年に在学している３クラスについてのみ１年間の看護婦イメージおよび職業イメージを比較した。(表９，10)看護婦イメージでは第一因子では１Ｎ１年から２年の間と，２Ｎ１から２年の間に有意差がみられた。第二因子では変化がなく，第三因子では１Ｎ１年から２年の間に有意差がみられた。職業イメージでは第一因子の２Ｎ１年から２Ｎ２年にのみ有意差がみられた。

表９　看護婦イメージの１年後の変化

	年度（学年）	例数	平均値 ± 標準偏差	t 検定
第一因子	'90(１Ｎ１)	48	3.81 ± 0.60	＊＊
	'91(１Ｎ２)		3.65 ± 0.58	
	'90(２Ｎ１)	44	3.51 ± 0.51	＊＊
	'91(２Ｎ２)		3.27 ± 0.42	
第三因子	'90(１Ｎ１)	45	3.71 ± 0.44	＊
	'91(１Ｎ２)		3.86 ± 0.52	

＊：p < 0.05　＊＊：p < 0.01

表10　職業イメージの１年後の変化

	年度（学年）	例数	平均値 ＋ 標準偏差	t 検定
第一因子	'90(１Ｎ１)	48	3.80 ± 0.54	＊＊
	'91(１Ｎ２)		3.65 ± 0.43	

＊＊：p < 0.01

６．現在の進路選択に対する評価に及ぼす諸要因の影響

現在の進路選択に対する評価を外的基準として「看護職を選んでよかった」に１点を，「よくなかった」及び「分からない」を併せて － １点を配し，数量化理論第一類により解析を行った。解析の結果は表11に示す。カテゴリーの重み値は偏相関係数が比較的大きい値（0.1以上）を示した要因についてのみ示した。＋ の絶対値が大きいほど重み値のカテゴリーを属性とするものほど肯定度が強いといえる。Ｉ１，６，９，13，16，19，20，24，25が影響を及ぼしている。Ｉ１の「科・学年」別では１Ｎ，２Ｎとも１年次が最も肯定的である。１Ｎでは２年次に肯定度の減少をみる。EPPS 検査では「追従」「持久」の欲求の強い者ほど肯定度が高く，「親和」「変化」の欲求が強い者ほど肯定度が低い。「支配」の欲求では中位の者のみが肯定的であった。各イメージそれぞれの因子の肯定度別にみた場合，看護婦イメージでは「仕事のきびしさ」の肯定度が高い者ほど進路選択の評価が否定的であり，「知的専門性」の肯定度が低い者ほど進路選択の評価が否定的である。職業イメージでは「仕事のやりがい」の肯定度が高い者ほど進路選択に対する評価も肯定的であった。参考までに同一集団で１年間の変化をみたものを表12に示す。

表11　現在の進路選択に対する評価に及ぼす諸要因の影響

要　因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
Ｉ１	Ｃ１	0.40	0.30	0.83
	Ｃ２	－ 0.20		
	Ｃ３	0.01		
	Ｃ４	0.18		
	Ｃ５	－ 0.43		
Ｉ６	Ｃ１	0.06	0.11	0.24
	Ｃ２	0.06		
	Ｃ３	－ 0.18		
Ｉ９	Ｃ１	0.19	0.17	0.52
	Ｃ２	0.04		
	Ｃ３	－ 0.34		
Ｉ13	Ｃ１	－ 0.16	0.12	0.24
	Ｃ２	0.07		
	Ｃ３	0.08		
Ｉ16	Ｃ１	0.26	0.13	0.32
	Ｃ２	－ 0.06		
	Ｃ３	0.13		
Ｉ19	Ｃ１	0.12	0.12	0.44
	Ｃ２	－ 0.04		
	Ｃ３	－ 0.32		
Ｉ20	Ｃ１	0.77	0.22	0.83
	Ｃ２	－ 0.05		
	Ｃ３	－ 0.05		
Ｉ24	Ｃ１	－ 0.14	0.13	0.25
	Ｃ２	0.06		
	Ｃ３	0.11		
Ｉ25	Ｃ１	0.36	0.26	0.65
	Ｃ２	－ 0.03		
	Ｃ３	－ 0.29		

表12　「看護職を選んでよかった」と回答した１年後の変化

年　度	学　年	例　数	%	X^2 検定
'90年	１Ｎ１	23	47.9	ns
'91年	１Ｎ２	16	33.3	
'90年	１Ｎ２	20	44.4	ns
'91年	１Ｎ３	17	37.8	
'90年	２Ｎ１	29	67.4	＊＊
'91年	２Ｎ２	7	16.3	

＊＊：p < 0.01　ns：> 0.05

Ⅳ．考　　察

看護婦イメージの因子分析および職業イメージの因子分析結果は第Ⅰ報と非常によく一致している。ただし，看護婦イメージの因子別平均得点では第二因子が最も高く，第Ⅰ報と同様であるが，因子に属する質問項目に若干の変動があったため今回第一因子と第三因子での順位が逆になっている。各解析結果で第Ⅰ報と多少異なるところがあるのは，今回EPPS検査も要因として取り上げ解析した影響が考えられる。

以下に新たに追加して調査した影響要因を中心に考察する。

1．看護婦イメージと職業イメージに影響を及ぼす諸要因

全くどの因子にも影響を及ぼしていない要因はEPPS検査では「支配」「内罰」「攻撃」であった。また特徴的なものとして言えるのは「達成」「養護」「変化」である。第Ⅰ報で看護職を選んでよかったと評価している者は「仕事のやりがい」を強く肯定し，また他のイメージの肯定度も高かった。よくなかったと評価している者は「仕事の大変さ」を肯定し，他のプラスイメージにも否定的であった。今回EPPS検査を要因に加えて検討したところ，「達成」「養護」の欲求の強い者は「仕事のやりがい」を肯定し，「仕事のきびしさ」は肯定していない。また「変化」の欲求の強い者は「仕事のきびしさ」を肯定していることが明らかとなった。この他に「仕事のやりがい」を肯定している者の要因として進路決定時看護職だけを希望した者，現在の進路選択に満足している者等があり，当然とえる結果が得られた。また「職業としての安定性」は看護職以外も希望した者だけが高い。数年前の筆者等の調査で他の進路に進まなかった理由の中で，免許を持って働ける職業の安定性を挙げている者が多く，今回統計学的に実証できたといえる。

2．看護婦イメージおよび職業イメージの1年後の変化

1990年と1991年に在学している3クラスについてイメージの変化を同一集団で比較してみると1N，2Nとも1年から2年の間で最も大きい。このことは他の研究者等も報告している。中だるみと言う拐え方でなく，現実の中で自己を見つめる時期と位置づけて指導していくのが望ましい。ただし，2Nの場合は2年の修業年限であり，この時期の変化は微妙で更に学習環境等の調査も併せて対策が必要である。

3．現在の進路選択に対する評価に及ぼす要因の影響

現在の進路選択に対して肯定的であるか否定的であるかということに他の多くの要因が影響を及ぼしている。まず第一に「科・学年」にみられる特徴は，1N，2Nとも1年次が最も肯定的である。EPPS検査では「追従」と「持久」の欲求が強い者は進路選択の評価の肯定度が高い。つまり計画をたてる時には経験者の指示を仰いだり，文献を検索する。あるいはやりかけた事を最後までやり通す，気を散らさずに仕事に熱中するといった事の欲求の強い者は自身の進路選択に満足しており，それらの欲求の弱い者が現在の進路選択に満足していないといえる。確かに追従や持久ということの示す粘り強さは看護の教育に要求される場面が多い。また，新しい事や違った事を経験してみたい，新しい仕事をしたい，流行を取り入れたいとう「変化」の欲求が強い者は進路選択の評価の肯定度が低いことはうなずける結果であるが，「親和」の欲求の強い者ほど進路選択の評価の肯定度が低いことは意外であった。

看護婦，職業各イメージの因子分析の肯定度別にみた場合，進路選択の評価に影響を及ぼしているのは「仕事のきびしさ」「知的専門性」「仕事のやりがい」の肯定度である。看護婦，看護職に対して知的専門性や仕事のやりがいを見い出している者は仕事がきびしいと受け止めておらず，現在の進路状況にも満足している。これらのイメージを伸ばして育んでいく教育が大切である。

Ⅴ．結　　論

1．看護婦，職業イメージに影響を及ぼしている要因で特徴的なものはEPPS検査の「達成」「養護」「変化」の欲求度であり，それらは進路選択の満足度とも関連がある。

2．看護婦，職業イメージは1年から2年の間で大きく変化する。これを現実の中で自己をみ

つめる時期と位置づけ学習環境等の影響も加味し，指導していくことが今後の課題となる。

3．進路選択に対する評価に影響を及ぼしている要因として「科・学年」「仕事のきびしさ」「知的専門性」「仕事のやりがい」の肯定度，およびEPPS検査の「追従」「持久」「変化」「親和」の欲求度である。粘り強さや探究心を育み，看護婦，看護職イメージをプラスに伸ばしていく教育が必要である。

謝　辞

本稿を終えるにあたり，統計的処理およびご助言ご校閲頂きました本学第一看護科の酒井恒美教授に深く感謝いたします。

文　献

1）林喜美子，他：看護婦と看護職のイメージに影響を及ぼす諸要因，川崎医療短期大学紀要，**10**，61—66(1990)

2）林喜美子，他：本学看護学生の看護職への態度に関する調査（第III報），川崎医療短期大学紀要，**9**，67—74(1989)

3）筒井真優美，他：看護学生の自尊感情と学習環境にかかわる因子の学年別，時期別変化，第18回看護教育，73—75(1987)

4）内野幸子，他：看護教育が学生の性格特性に及ぼす影響EPPS性格検査による調査分析から，第20回日本看護学会（看護教育）集録，194—196(1989)

5）山本よしゑ，他：看護学生の看護職へのアイデンティティの形成過程，第16回看護教育，140—142(1982)

6）A. L. ADwards. 肥田直訳，EPPS性格検査の手引（1970）日本文化科学社

7）永田忠夫，看護婦という職業を選択した要因について，愛知県立看護短期大学紀要13号，65—75(1975)